

図書館の こんなこと知らなかった

8

英米語学科4年次生 松本 隆弘

私は、今年の2月から京都外大の図書館でアルバイトをしています。仕事の内容は、書庫にある本の請求記号などのデータをコンピュータに登録する作業です。この作業にかかわるまで、図書館の本は全てコンピュータに登録されていると思っていたので、いまだに登録されていない本がたくさんあることに驚きました。この作業により、簡単に蔵書検索で調べることが出来ます。作業中は、データの入力ミスがないよう十分に注意して行っています。

また、他の図書館との相互協力制度にも驚きました。去年、華道部の華展に参加した時、何か参考になる花の本を捜していました。なかなか見つめることが出来なく、諦めかけていましたが、図書館員の方に直接ある短期大学に、本の所蔵を問い合わせてもらい、実際にそこの短期大学の図書館で本を手にとり、閲覧することができました。その時、改めて相互協力のすばらしさに感じました。京都外大にはたくさんの本が所蔵されていますが、それでは足りないときや、書誌がなかった時などは、諦めずに図書館員の方に相談することをお勧めします。

図書館には、まだまだいろいろな活用術があります。ただ何気なく利用するのではなく、それらをうまく活用することで、より充実した学生生活を送ることが出来るのではないかと思います。

ドイツ文学わき道散歩(13)

島崎藤村が作詩した『椰子の実』という唱歌がある。『遠野物語』で知られる民俗学者・柳田國男から聞いた話を藤村が叙情豊かな詩にまとめたもので、二人の親交の賜物と言えよう。これと似た逸話がドイツ文学にもある。

戯曲『ウィルヘルム・テル』は、スイス旅行から戻った友人ゲーテに聞いたスイス農民一揆の英雄・テルの伝説(実は本当は存在しなかったらしいが)を元に創作された、フリードリヒ・フォン・シラーの作品である。この作品はのちに序曲第4部のファンファーレで世にテルの名を広めたロッシーニ最後のオペラ『ウィリアム・テル』を生むこととなる。歴史的研究と豊かな想像力で作品を作り上げる「引きこもり作家」シラーは、彼とは対照的に実生活の体験を作品に活かす「お出かけ作家」ゲーテと美しい友情で互いに刺激を与え合い、ドイツ文学に多くの至宝をもたらした。ゲーテを喩えて燦然と輝く太陽と言うならば、シラーは穏やかに闇夜を照らす月のような存在と言えるのではなからうか。ゲーテの代表作『若きヴェルターへの悩み』は自殺者を出すほど熱狂的に流行したのちも、仏皇帝ナポレオンが愛読し、日本ではヒロイン「シャルロット」の名が製菓会社名の由来になるなど、世界中で時代を越え今なおドイツ文学の傑作として読まれている。対してシラーは“第九”の作詩者、『ウィリアム・テル』の原作者として、時代を経てゆるやかに形を変え輝いている。今年シラーが没してちょうど200年。「半身が失われたようだ」と、その死を悼んだゲーテの墓は、現在ヴァイマルでシラーの墓と仲良く並んでいる。ところで墓と言えば、運命の悪戯を感じさせる詩人の墓があるのだが、これはまた別のお話、次の機会にお話ししよう。

1999年度ドイツ語学科卒業生 小林 ゆかり